



統 一
昭和十七年十一月二十四日 第三號
 昭和十七年九月一日發行 每月一號發行
 第五百七十號
 第四十七年
 九月號

昭和十七年十一月二十四日 第三號
 昭和十七年九月一日發行 每月一號發行
 第五百七十一號

目 次

得定者心則不散	……………	本 聖 院
遺文に於ける五大要義(二)	……………	本 多 日 生
信 と 行(完結)	……………	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(十六)	……………	河 合 陟 明
記 事		
○本部團報		
○福島教信		
○入帳報告		

號 月 十 年 七 十 四 第

定得者心則不散

本 聖 院

輸送に協力せよ、不急の族は差控へよと鐵道局では注意あるにも不拘、益々交通は頻繁となる。これは總ての仕事が都市中心となつてゐるから、自らかく成らざるを得ない實情ではあるまいか。

市中の乗物でも近來は子供伴れの婦人が特に目立つ、何時でも超満員で老人患者の外出は危険である。それは云ふ迄もない皆食はんが爲の買出である、背に吐はかへられず、午前にも午後にも籠下けて、一日五六時間は立ち暮す。毎日家事を打捨て、生きんが爲といへば一面同情の念に堪えないが、豈計らんや、これが婦人達の新しい諸定三昧の修行とは……同じ行列でも夕方ビヤホール前の元氣な若人等の長蛇の陣列醜態はあるまい、これこそ猶太化である。彼等は全く利己主義である、自分が一杯のビールに有りつけば家族を顧みる暇もない、而して千杯の罪業を果ねて居ることに心付かない、淺ましい餓鬼道の姿を公衆の前にさらけ出して恥とも思はない。

又若い職業婦人達が夕景すし屋にズラリ並列して、中には煙を輪に吹いてゐる顔を見ては十年先が思ひやられる。→體酒や煙草が生活の必需品か否は、心靜かに考へてみるがよい。釋尊はこの害毒三十六條を指摘して警告されてゐる。夫は單に飲食に限らず、人生百般の事柄に對して慈誨を與へられた。此の尊い佛陀の明教を輕視しては、人類文化の眞の向上は得られないし、猶太問題の解決も困難と思ふ。

世間が混亂すればする程、一面には心靜かに入定三昧が大事である。心定にあれば世間の相も、人生の老病死も自ら解決されて行く。法華經には「無上の寶珠は求めざるに自ら到る」と教へられ、又日蓮聖人は「釋尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然にかの因果の功徳を譲り與へたまふ」と、觀心本尊鈔に一念三千義の歸結、受持成佛を明示された。

散亂にして放逸なる者は、現世には墜落落伍し、未來には永く惡道に苦しまむ。宜しく心を一境に攝め唱題受持、感謝幸福の光輝ある日常に活躍すべきである。

遺文に於ける五大要義 (二)

本 多 日 生

日蓮聖人の『法華眞言勝劣事』といふ御遺文の中には、眞言が法華よりも勝れる、大日經が法華經よりも尊いといふことに就いて、眞言の方の言ひ草をいろ／＼擧げてこれを論破して居られる。それは第一に印と眞言というて、手に印相を結ぶことと、口に眞言を唱へることとの二つが法華經には無い、法華經には實相の教はあるけれども、それはチョウド武士が身體がしつかりして居るといふやうなもので、素裸の武士である。これに印と眞言とを加へれば、武士が甲冑を着て薙刀を持ったやうなものである。どんな強い武士でも素裸の奴と、甲冑を着て薙刀を持った奴と喧嘩をしたらどつちが勝つかといふやうな事を、眞言の人が言うて居る。それを日蓮聖人は嘲笑つて、そんな事は素人だましの話である、教の實質に於て、印と眞言といふやうな、口でムニヤ／＼と言つたり、袖口の中で指の先を二本握つてそれで印相ぢやといふやうな、そんな娑羅門外道の習慣から來たやうな事が何が尊いことがあるか。法華經は二乗作佛、久遠實成の二大教義を説いて居る、これが即ち佛教の本質であ

る。大日經の教は二乗に對してこれを拒絶して、二乗を寄せつけぬやうな事を言つて居る、佛に就いては釋尊の顯本をしないで、毘盧遮那佛といつてもそれが誰の事だかわからぬ、釋迦と大日の關係が一つやら二つやらわからぬやうなまごついた事になつて居る。さういふ大事な二大教義を忘れて、唯ムニヤ／＼と言つたり、衣の内指を二本握つたとか三本握つたとかいふやうな、そんな魔法使ひみたやうな事をエラさうに思つて居る。チヨウド芝居でやる仁木禪正のやうに、「消えて無くなれツ」とやると鼠が禪正になつて巻物をくはへて印相を結んでドロ／＼と消えて行く、あんなやうな事をやるのが佛法だと思つて居つた。それは唯だ神祕的といふか怪誕的といふか、譯のわからぬ魔法使ひみたいな、天一とか天勝とかいふやうなものに佛教を見ると、サア天一の方がえらいか、天勝の方がえらいか……といふことになるのだけれども、眞の教といふものはさういふ所には無いのである。

だから法華經に二乗作佛、久遠實成と説いたのを價値なき事として、大日經に印眞言を説いたのを價値ありとするのは、これを劣謂勝見の外道なりと日蓮聖人は言はれたのである。劣謂勝見といふのは劣れるを勝れたりと謂ふ見解で、劣つたものが勝れたやうに見えるのである。印眞言の如き價値なきものを以つて、法華經の二乗作佛、久遠實成の最も尊き教を侮辱するといふやうなものは、この意味の外道だといふことを仰せられて居る、そこを迷はぬやうに意識しなければならぬ。

今の法華の學び損ひの人達は、『法華は南無妙法蓮華經と言ひさへすれば宜い、それが妙ぢや』などと言つて居る、それはやはり單に眞言的の言ひ表はし方ナンである。或はまた「何でも構はんから法華をやつて見い、法華がお經を讀んだら狐が出て来る、狸が出て来る」「どうして出て来る？」「どうしても斯うしてもない、一つカチ／＼とやつて見い」といふ風に、やはり魔法使ひ式に言ふのであるが、さういふ事は日蓮聖人が屢々警められて居る。宗教は動もするとさういふ間違つた態度を執りたがるものである、大本教でも天理教でもその道に凝つて居る者は、やはりそんなやうな事をやる。印度に於ては外道婆羅門がそんなやうな事をやつた、支那に於ても仙人といふ者がいる、の仙術を使つて、狐筆から駒が出たとか、口から霧を吐いて姿が見えなくなつたとかいふやうな事をいろ／＼やつて居る。さういふ魔法みたいな事を以てえらいと思つて居るのを日蓮聖人は非常に攻撃せられて、そんな事で法の邪正を考へたならば迷はされる事のみ多くなる、そんな奇蹟的な事柄に依つて法の邪正を見るべきものではないと言はれるのである。日蓮聖人も雨乞の祈をせられたといふ事がある、鎌倉の良觀房がいくら雨を祈つても一滴も降らなかつた、そこで日蓮聖人は自から二、三人の弟子を伴れて稻村ヶ崎に立つてさうして自我偈を一巻讀まれたところが、雨が沛然として降つた、良觀房は非常に忌々しがつて男泣に泣いたといふ事實がある。併しそれを日蓮聖人は自分の功名のやうには言つて居られないのである、ナニも雨を降らすといふやうな事は大した事ではない、少し人間が精神を籠めてやれば誰でも雨を降らすことが出来る、能因法師といふのは色好みの法師であるけれども、併し

その人が歌を詠んだだけで雨が降つた事がある、ナニも歌を詠んで雨が降つたからといつて、そんな事で天を感ぜしめた位のことそれが程エライ事ではないと言はれる。日蓮聖人は決してさういふ雨乞の優劣くらゐで以つて、『サアどうだ俺の方が偉からうが……』とは言はれない、そんな事は誰でも出来るのだ、一生懸命に祈つても雨が降らぬといふのは其の人間がアカンのだといふ意味に言つて居られるのである。

法華の信仰が將來に向つて尊い價值を有する所以は、決して法華經を讀んだら死んで硬くなつて居つたお婆さんが軟かになつたとか、氣が狂つた娘の前で法華經を讀んだら狸が出て來たとか、さういふやうな事を以つて言ふべきものではない。只今申すところの二乗作佛、久遠實成といふその教義の意味合をヨク心得て、さうしてそれを平たく誰にもわかるやうに説明をして行かなければならぬ。二乗作佛とか久遠實成とかいふのは昔の術語であるし、何か縁の遠い話のやうに思ふけれども、その精神をヨク消化して來るといふと、いつの時代に於ても大切な宗教の實質本體の問題がそこにあるのである。そこまでの意味を、この『二箇の大事』といふ聖語から能く領解するやうに心懸けて行くのが法華經の卓越といふことを眞に會得した人といふことになるのである。

さうして最後一番大事な問題は、佛様の顯本といふことに在るので、その佛様がなければ吾々人間は救はれないのである。チョウド日本の國で言へば、日本人が大事であるとか、大和魂が大切である

とかいふけれども、結局は皇室の存在といふ事が最も日本に取つては大事なことになるのである、皇室の存在が無くなれば日本人の大和魂といふものも無くなつてしまふ譯である。吾々人間が立派な精神を有つて居るといふても、宇宙に本佛の存在といふことが明かにならなければ、だん／＼善い精神は消えて行くのである。それは宗教を棄てたる人類が日に月に、或は思想が悪化するとか、精神が墮落して行くといふ懸れむべき醜狀を暴露しつつあることを考へるならば——さうして今日および將來の宗教としては、生ぬるい宗教であつたならば學問や理窟で一たまりもなく叩き込まれることを考へる時、如何なる科學的哲學的研究の上にも毅然として壞られない壽量品の健全なる本佛の顯本といふ教義が、最後人類を善化する根本の力であるといふことが明瞭になるのである。間に合せな宗教でも用を成して居る間はそれでも宜いけれども、併しだん／＼人間が小理窟が多くなつて來て、儒教で天道といつても『天道とは何んぞや』……基督教で神が世界を造つたといつても『そんな無茶な事があるか』……といふ風に、一理窟でみな撥ね返されてしまふやうな時代に、茲に如何に研究を進めても動きのない、所謂眞理の上に儼存して居る本佛の實在といふことが、法華經の壽量品に依つて説かれた。釋尊の廣大なる御智慧と御慈悲と、一切を傾け盡した所謂釋尊の出世本懷の御經として法華經の壽量品がある、法華經の勝る所以は壽量品の顯本に在る。壽量品に至つて釋尊の本當の尊嚴さを説き顯はしたる一事、それが法華經の勝る所以であり、而してそれが佛教の價值ある所以であるとい

ふことに歸着するのである。

その事はやはり『開目鈔』の中に

一切經の中に此の壽量品ましますば天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんがごとし

と仰せられて、一切經は廣しと雖も此の壽量品の顯本といふ事がなかつたならば、チヨウド天は廣いけれども日月が無いやうなものである、天に日月出でざれば椽の下も同じものである、人が仰いで天を尊ぶのは、日月あつて光を發するが故にこれを尊ぶのである、天から日月を除つてしまへば、トネルの内も穴倉も同じものである。一切經の中に此の壽量品なくんば、天に日月なきが如く、國に大王無きが如く、山河に珠なきが如く、人に神なきが如きものであると仰せられる、その意味よりして法華經の卓越といふことを心得なければならぬ。唯ボンヤリと法華はエライものぢや、法華はお經の讀み方が勢ひが良い、題目はなか／＼陽氣ぢや……さういふ素人じみた床屋の世間話のやうな事は一切廢絶てしまはなければいけない、そんな事を言うてもそれはナニも法華の卓越を語る説明になつて居るものではないのである。法華は陽氣だから宜しいと言ふならば、陽氣の眞似をする者はイクラでもある、神道の方などに行けばモット陽氣だといふものが出て来る。東京の人間は随分亂暴な者が多いから、何でも陽氣なのが宜いといふと、念佛の方でも「一つ陽氣に稱へようぢやないか」と言ひ

出す、陽氣な念佛といふのは恐らく日本に東京だけであらう、それはどんな事をやるかといふと、浮いたやうな調子で「ナンマイダーイ、ナンマイダーイ」と言つて、夏になると大山詣りなどといつて鈴をチリン／＼鳴してやつて居る。それは念佛でも稱へ様で陽氣になるけれども、それが陽氣に聞えたらからといつて何にもならぬ、下らない事である、そんな事の競争を宗教がやり出すといふのは、まるで茶番狂言に等しきものである。眞に法華經の尊いのは、只今申すとほりに二箇の大事、而も最後は壽量品に於て本佛の顯本をなされて、眞に吾々の救はるべき御佛がハツキリと示されたことに於て吾々は法華經を信するものであるといふことに歸着しなければならぬ。

先づ法華經の表面からながめた場合でも、その位の事を考へてかかるのが法華經の卓越といふ一つの大事な教義になつて居るのである。(此項終)

信 と 行 (完結)

小林 一郎

人間といふものは唯理窟で生きてるものではありません。人間には感情がありますから、感じの上に於て成程有難い、貴いといふやうな感情が起らなければ、凡ゆる困難を冒して善い事をし遂げることの出来るものではありません。そこに於て宗教的信念といふものの必要が感ぜられて来るのです。ドイツの哲學者のカントといふ人は非常に冷静な人でありまして、八十一年の生涯の間殆ど日課を一日も間違ひないといふ位、几帳面な人で、餘り感情的なことは言つて居りませんが、カントの倫理學を讀んで見ますと、人間が感激するといふことは大事だといふことを説いて居ります。「感激なければ大事は出来ん」といふことを言つて居ります。吾々共がかういふことを言つても大したことはありませんが、あんな冷静な、八十一年日課を間違ひなかつたといふカントが「感激なければ大事は出来ん」と言つて居りますのは、よく

よく思ひ切つたことであらうと思ひます。確かにさうです。人間感激しなければ大事は出来ません。自分の義務だとか、職分だとか思つてると、先のヨーロッパの話のやうに或る程度までしか出来ません。それ以上になれば出来ないやうになる。併し、皇室の御恩、國の御恩に感ずる、或は佛教を信じて佛様の御恩に感ずるといふことになりますと、所謂感激の思ひを持つて、どんな困難にも耐えられるといふだけの力が心の底から湧き起るのです。これを養はなければなりません。それを平常から養つて置かなければなりません。一朝事あつた時に急にやうと思つてもいけません。平常養はなければならぬのです。世間の名譽を博するとか、賞讃を得るといふやうなことは多く派手なことです。併し派手なことよりは皆日々のことを本當に魂を打込んでやれば國は健全に發達いたします。お母さんが子供を教育するのに、毎日の食

物を氣を付けて、毎日生活に自分の注意を拂つて一度も病氣しないといふやうな成績が得られれば、お母さんとしては満點でせう。所が平常食物を勝手に食べさせ、腹一ばい食べさせて、腸チブスを起して四十度も熱が出たからといつて、二晩も三晩も寝ずに看護するのも、まあ感心だけれども、併し平常の用心には及ばないことでせう。これは平常用心して病氣を起させないやうにするのに比べれば成績は悪い。平常放つて置いて、熱が出たからといつて二晩も三晩も寝ずに看護したのはおかしいことです。それより平常用心して病氣をさせない方が尊いのです。普通世間の賞讃を當てにしたのでは本當のことは出来ません。世間の賞讃だけを博するならば、成るべく派手なことをしたいといふことに傾いてしまふのです。それではいけない。人は知らずとも、又認めなくても日常のことに魂を打込んでやらなければ本當に行かないのです。それを人に見られたいといふ欲望ではいけないでせう。皇室の御恩、國の御恩、親の御恩、一切衆生の恩を辨へて、人が見ないでも、報酬があつても、なくても、そんなことに頓着なく、自分の全力を打込んで、自分の受けた御恩の萬分の一に報ひようといふこの真心がなければならぬ。これは平生養ふことです。お互ひが佛様

を禮拜し、お經を讀み、題目を唱へる間に恩に感じて、生命を賭けて恩に報ゆるといふ感激の心を養はなければなりません。だから宗教といふものは、唯理窟を言つても駄目です。本を讀んで理窟が分つただけでは駄目でありま。本當に利害損得を忘れて感激する。この心持があつて、これが現はれてそこに初めて偉大な働きが出来るのであります。だから宗教といふものは單なる哲學とは違ふのであります。理論が幾ら分つてもそれは宗教といふものには缺けるのです。まるで値打がないとは言へないが、缺ける所があります。感激することは大切でありまして、人間が心を養はなければ、事ある時に役に立たないのです。慌ててやつて、その時は間に合つても後に續かないといふ例は幾らもあります。甚だしいのになると、慌てると害になることがあります。私は小石川の竹早町に住んでゐたことがあります。近所に老人が居て、三十人ばかり女學生を世話して居りました。その時分私は若かつたのですが、老人は六十以上の洵に親切な人でした。私も近所だから交際して居ました。冬になると防火の稽古をします。女學生などを集めて、合圖があると皆風呂敷を纏めて出掛ける。これはだん／＼うまくなつた。合圖があると皆一列に梯子段を飛び出して見事だと思つて見てゐました。所が或る

日、本當の火事が直ぐ家の後から出ました。さうしたら何にもならなかつたのです。赤インキの墨をひつくり返して、背中にこぼして血が出たと騒いだり、それは惨々
 の態でありました。近所で見えて居る防火の稽古は役に立
 たんと言ひました。何故役に立たなかつたか。考へて
 見ると、明日の午後三時に火事があると、前に火事を作
 つて置くからうまく行く。本當の火事は突然に起る。三
 時なんて分つては居ないので。それですから防火の稽
 古を形の上でやつてはいけない。心を作らなければいけ
 ないのです。慌てないやうな、どういふ時でもうろたへ
 ない心を作つて置けば、防火の稽古はしないでも火事の
 時に狼狽しないでせう。私はさういふ出来事を幾つも見
 て、平生が大事である。何時でも心を養ふといふこと
 に力を打込まなければならぬといふことを痛切に感ずる譯
 であります。今この忙しい世の中で面倒なことをやるに
 は及ばんといふ人が居りますが、それはいけないことで
 す。先づ心を養はなければいけない。唯眼の前のことは
 かりをやつて居ると、一寸は我慢してやつても、續けば
 飽きる。平生暇を作つて心の土臺を養ふことが必要であ
 ります。その爲に吾々は信仰生活を勵むのであります。
 決して信仰をして直ぐに病氣が癒るとか、又儲かるとい
 ふやうなことではいけません。平生心を養つて置きませ

いふ複雑な時代には衝突したら何とかするといふ解決す
 る覺悟を平當持つて居なければ、唯學校で習つた倫理道
 徳では駄目であります。

こんな話があります。赤ん坊が夜中に熱を出した。醫
 者を電話で呼び、氷を買ひにやらうと、下女がなんかを
 別に藥を買ひにやつた。もう一人に醫者を呼ばせて、さ
 て且頃優しい娘に氷を買つて来て呉れと言つた所が、明
 日修身の試験がある。夜通し勉強するから、氷を買つて
 來られないと言ふたのです。これだから修身はいけな
 い。成程點が良ければ宜しいが、併し赤ん坊が熱を出し
 て皆騒いでるのに、たかが氷位、修身の試験があるから
 と買つて來ないのはいけないと思ひますが、滿點が取れ
 なければ仲間が恥しいと考へるのでせう。併し實際に善
 いこともせず、唯試験に百點取つて何の意味がありませ
 うか。併しこの娘が悪いのではない。何でもかでも點が
 悪ければいけないとしたら、かうしたことになるのも已
 むを得ないでせう。こゝに人々は眼を付けなければいけ
 ない。或る一部の人を咎めてはいけません。世の中の人
 が、一軒家を持つて居る人が先に立つて倫理道徳の根本を
 示さなければいけない。若い人では本當の解決は付かな
 い。先の電車の例でも、人をつきのければ親切にならず
 又乗らなければ約束を果せない時どうするか。これは何

んければ、事に當つて慌てず、騒がず、自分の職分を全
 うすることは出来ないのであります。

それで今日學校で倫理道徳といふやうなことが課せら
 れて居りますが、動もすれば役に立たんといふのはそれ
 なのであります。お前は若いから人に親切を盡さなけれ
 ばならない。親切が大事だと教へてやる。又お前は若い
 から約束を守らなければならぬ。約束を守ることが大
 事だと教へる。若い人は親切も、約束もと思つて居りま
 す。すると朝誰々に會はふと思つて電車に乗らうとする
 と電車は満員で乗れない。約束を守る爲には人をつきの
 けて乗らねばならぬ。それでは親切にはならぬ。親切を
 しようとするれば約束が守れない。約束を守らうとする
 れば親切が出来ない。さういふ時に若い人はどう思ひませ
 か。學校で習つた倫理道徳は役に立たん。やめてしまへ
 といふことになる。それで墮落することになります。私
 の學校などに來る學生も、どうしてこの學校に來たかと
 言うと、勉強して國家の爲に盡す爲めですと皆言ふ。法
 律を習つて詐欺の稽古をするといふ人はありません。皆
 感心なことをいひます。この感心な青年が世の中に出て
 墮落するのは今の學校の教へる倫理道徳が矛盾して來る
 からであります。先程の親切と約束の話のやうに倫理道
 徳が衝突してしまふから面倒臭いとやめてしまふ。かう

でもないことです。早く行けば宜しい。早起きして十五
 分位前に行けば宜しい。満員電車でも、少し待つ間には
 乗れるのが來ます。さうすれば人をつきのけずに済むし
 約束も果せる。朝遅く起きて、わつとやつて飛び出すか
 らいけない。少し苦勞して十五分ばかり早く起きて行け
 ば宜しい。かうすれば矛盾する道徳も矛盾しなくなる。
 自分が樂をしようするからいけないのです。朝晩しよう
 とするからいけない。苦しんで恩に報ひようといふ覺悟
 さへあれば、世の中に幾多の困難がありましても、困難
 な中を超へることは必ず出来るのです。今のやうに複雑
 な世の中になると、樂して居て成るべくうまいことをや
 らう。苦勞せず人に認められようといふ淺ましい考へ
 を持つ者が多くなる。それでは何事もうまく行かない。
 慈忍といふことは非常に尊いことばです。慈といふ心持
 があると何でも我慢する。そして皇室の御恩、國の御恩
 に報ゆる爲に慈悲を持つて一切の人の爲にしようといふ
 ことになる。又忍ぶといふことは幾らでも出て参りま
 す。暑さ、寒さを忍ぶ。どんな苦勞も忍ぶ。これが所謂
 慈忍の力であります。私は今の時代に於て、この慈忍の
 力の偉大なることを感じます。この慈忍の力の起りは報
 恩から來る。恩に報ずる爲に自分が盡す。こゝをしつかり
 掴へて置けば、何んば困難が後から／＼起つても解決

するのにはさう難かしいものではありません。これを平生養ふことです。急に養つても間にあひません。暇のある毎にといふのではまだいけな。暇を強ひて作つてまでも大いにやる。この本當の東洋固有の貴い性質を十分に昂揚するやうに一致して養つて大きくするやうに力を盡したいと思ふのであります。これが日本の國に佛教といふものが弘まつて、長い間皇室の御保護も加はり、又有力な人がこれに力を盡した根本であらうと思ひます。恩に報ずるといふことに付ての貴い事蹟はいろいろありますが、今日は宗教方面のことは澤山お聞きでありませうから、方面の違つた所に實例を求めて述べて見たいと思ふのであります。

皆さんは算盤を使つて重寶を感じて居られるでせう。日本の算盤といふものは世界が驚いて居る。ヨーロッパでどんな精巧な計算器を使つても算盤には及ばん。算盤のあるのは日本の誇りであります。それで算盤が日本に普及した歴史を調べて見ると、恩に感ずる感激の念の歴史なのであります。これは非常に面白いことだと感じて居ります。その起りを言ひますと太閤秀吉が大阪に城を築きました。その時に大阪の城の石垣を大名に請負はした。徳川はこゝからこゝまでの間。前田、上杉はこゝからこゝまでといふ風に請負はせた。石垣は諸大名の協力

から大變喜んだのであります。そして當日定められた時刻に毛利勘兵衛を連れて出まして、秀吉に目通りさせました。秀吉は毛利勘兵衛をぢかに呼んでいろ／＼聞いた。お前は見積りがうまいが、どういふことをやつて居たのか。そしていろ／＼聞いて、お前は感心だ。お前はその道で身を立てたら宜からう。どうだ、支那に留學しないか。研究をしないかと秀吉は勧めました。俺が保護してやる、明に行つて數學を勉強して来い。池田輝政は關白秀吉に依つて自分の臣下が留學させられるといふので、これ程嬉しいことはないと思ひました。そこで毛利勘兵衛は明に行き、足掛け三年で算盤を習ひました。中途で事情があつて残念乍ら歸つて来たが、その時算盤を持つて来たのです。それまで日本では手のかゝる方法で勘定をやつて居ました。それで支那から歸つて秀吉にお目通りして、そしてお禮を言つた時に、勘兵衛は算盤といふものが支那にあつて、手早く勘定が出来るといふことを秀吉に申しました。秀吉は大變喜んで、それは結構だ良いものを持つて来て呉れた。それを作らせたなら宜からう。萬事お前に任せるからと言はれたものですから、そこで勘兵衛は、近江の大津に庄兵衛といふ器用な細工人のあることを知り、これと呼んで言ひつけました。關白殿下のお聲掛りといふので日本中にひろまる。大變名譽

で出来たものであります。何間四方といふ大きな石が使つてあるが、それは諸大名聯合の力で出来たのですが、その石垣を秀吉が各大名に割當てて、折々見廻りますと池田輝政の所が一番成績が宜しい。早く出来る。又手際が良い。群を抜いて居る。秀吉は人の長所を認める人でありますから、そこで池田輝政を呼んで、お前の所は抜群の出来で感心だ。何か理由があるだらう。どうしてお前の所はあんなにうまく行くか。後の参考の爲だから聴きたい。かう秀吉が言ひました所が、池田輝政は、お見出しに與つて洵に有難いが、私の臣下に毛利勘兵衛重能といふ者が居り、これが見積りの名人であります。私が三河に城を築いた時に毛利勘兵衛に見積りさせました所が成績が良ろしかつた。又播州姫路に城を築く時も彼に見積りさせました。今回は三回目であります。御命令に依つて石垣を作ります。これを毛利勘兵衛に見積らせました所が、只今お褒めを蒙る成績を得て、あゝいふ家來を持つて居ることを身の名譽と思ひます。かう池田輝政は言ひました。それから秀吉は人の才を愛する人でありますから、それは善いことだ。明日毛利勘兵衛なる者を連れて来い、自分が會つてやる。池田輝政非常に喜んでそれを勘兵衛に傳へました。兎に角關白殿下の御目通りを得るといふので、當人の面目は勿論、池田家の名譽だ

なことだ。庄兵衛感激して、多勢細工人の居る中にお見出しを受けたのは嬉しい。生命にかけてもやりませう。庄兵衛は一生懸命で作つた。見本を作つて勘兵衛は關白殿下に見せました。秀吉も大變喜んでこれで宜からう。そこで全國にこれを行使といふことになりました。これが算盤の始まりなのであります。話はまだこれで終らない。それから後に毛利勘兵衛は主人の池田侯の所に歸つて重く用ひられて居りました所が、その内に秀吉は死ぬ。關ヶ原の一戦で石田三成敗れて徳川の天下になる。大阪冬の陣、夏の陣で城は落ちて豊臣は潰れました。天下の大名は徳川に反抗する者一人もない時に、毛利勘兵衛一人不快であつた。どうも意氣地のない奴等だ。侍といふものは豊臣が潰れば徳川に行つてお辭儀する。侍とはそんなつまらない奴なのだらうか。自分は太閤殿下の御恩を受けて支那に留學し、算盤を持つて来たが、よし侍はやめだ。そこで大小を投げ出して京都の町人になりました。主人の池田侯が幾ら止めても聞かない。とうとう町人になりました。偉い人です。天下の大名は恩を忘れて徳川にいたが、俺は身分は低くてもそんな馬鹿なことにはしない。そして町人となり京都に居りまして算盤の先生になつたのです。その頃は大阪が繁昌し始めた頃で、商賈取引や何かで算盤の必要が感ぜられて、算盤を

習ひたい人も多くなつて来た頃で、勘兵衛も侍の時より餘程暮しは楽になりました。これが日本の和算の始めであります。徳川時代に野田文蔵とか關新助といふやうな和算の大家が出ましたが、これは皆毛利勘兵衛の四代目の弟子であります。若し勘兵衛が居なかつたら和算の名人が出なかつたでせう。日本の數學の道に於ても毛利勘兵衛は開祖であります。勘兵衛に働きをさせたのは秀吉でありまして、その御恩に感じて算盤を勘兵衛は普及した。このことは日本で算盤を考へたら忘れてはならないことでもあります。

何か感激とか申しますと、恐ろしく宗教的に聞え、算盤といふと物質的のやうであります。算盤の歴史は感激の歴史であるといふのは面白いことでもあります。かういふことを私は今でも思ふ。日本で新しい發明發見、いろ／＼なものがないならぬ。併し本當に恩に感ずる。皇室の御恩、親の御恩、國の御恩、佛様の御恩に感ずるといふ心持で、生命がけてやつたら發明も發見も出来る。西洋人の思ひ付かないやうなことも幾らでも出来るといふことは、今日はそれを獎勵して来たが、恩に感ずるといふことで生命がけてやれば出来る。良いものは出来る。これが本當に國を立直す土臺になることだらうといふことをいろいろ話して参つたのであります。

混んで居ました。すると無闇に人が出るな、と皆言つて居ります。これではいかん。皆が人を咎めることをやめて、恩に報ゆる爲には少し位苦しくても宜いといふ健氣な心持になれば、凡ゆる問題が解決するに相違ない。この際に於て吾々は洵に力の足らんものではないとありますが、足らんなりに幾らか貢獻を致したいといふことを心掛て居る譯であります。丁度お盆を迎へまして、報恩のことを思ひ付きのまゝ、人に言ふより先づ自分で考へて、幾らかでも意義ある一生を送りたいといふことを念願致しまして、有體のこと申上げた次第であります。〔終〕

夫れ以れば持戒は父母師僧國王主君一切衆生三寶の恩を報ぜんが爲なり。父母は養育の恩深し、一切衆生は互に相助くる恩重し、國王は正法を以て世を治むれば自他安穩也、之に依りて善を修すれば恩重し。主君も亦後恩を蒙りて父母妻子眷屬所従牛馬等を養ふ説ひ爾らずと雖も一身を顧みる等の恩是れ重し。師は亦邪道を閉ちて正道に趣かしむ等の恩是れ深し。佛恩は言ふに及ばず。等三云。

一日蓮聖人

今後に於て私共がかういふやうなことを考へて参りますならば、確かに佛教の信仰といふことと、日常の生活といふものとはびつたり結び付いて來ると思ひます。さうして國が何處までも榮えて行く場合に於て、日本の恩惠を受けるものは獨り東亞に止らん、何故ならば力づく腕づくでは駄目だといふことが分れば、假令イギリスやアメリカが潰れなくても横暴はしなくなりません。又イギリスやアメリカに代つて他の國が興つて横暴しようとしても、正義の前では力づくで駄目だといふことが分つて居ればそれが出來ないから、この際日本がふん張るのは東亞を救ひ、世界を救ふ、そして正義の力の大事なこと世界に知らせる爲に役に立つ。吾々は大變大きな仕事をして居るのであります。これを中途で棄てるやうなことでは相済みませんから、本當のしつかりした信仰を勵んで、恩に報ゆるといふ眞心を持つて、各自のことをやる。又自分が骨折れば、他人の骨折も有難いと思ふから、互ひに感謝しよう、互ひに認めようといふことにもなります。世の中でお互ひに認めるといふことになれば宜ろしい。それを氣付かずに、俺だけ忙しいと思ふといけない。俺だけ忙しいのに、こんなに何故電車に乗るんだらう。かうなつてしまふ。今日も私は金澤へ参りましたが、金澤に於ても、日曜日で電車に乗ると大變

佛の言はく、若し菩薩ありて慈忍に住すれば十種の利益あり、何等をか十となす。一には火も焼くこと能はず、二には刀も割くこと能はず、三には毒も中ること能はず、四には水も漂はすこと能はず、五には鬼神の爲に護らる、六には身相莊嚴を得、七には諸の惡道を閉づ、八には其の所樂に隨つて梵天に生ず、九には晝夜常に安し、十には其身喜樂を離れず。

——月燈三昧經——

若し問ふ者ありて、誰か是れ恩を知りて、能く恩に報ゆる者なりやと言はば、應に正しく答へて言ふべし、「佛は是れ恩を知りて、能く恩に報ゆる者なり」と。何を以ての故に、一切世間、恩を知りて恩に報ゆるは、佛に過ぎたる者なきが故に。

——般若經——

布施するものは福を得、慈心あるものは怨を得ず。善を爲すものは惡を銷し、欲を離るものは惱みなし。

——長阿含經——

本佛實在の宗教哲學(十六)

河合 陟 明

十三、本佛論の問題とは何ぞや(承前)

予は以上において、本佛論の課題たる佛陀論の諸問題を、しばらく島地大等氏の所論によつて明かならしめた。それは佛敎史の遺物、然り過去の文化の遺物であると共に、今はすでに亡き篤學の士たりし島地氏の遺物でもあり、しかも一旦これが解決せられたる時は、人類將來の精神界裡に大光明を放つべき radiant heritage 偉大なる遺物！ したがつてその正明透徹なる解決を要請してやまざる、偉大なる文化財としての遺物であるのである。まことに本佛問題の解決は、かのコペルニクスの、否、かのカントのコペルニクスの轉回よりも、更に大なるものであらねばならぬ。何となればそれは、純粹理性における *Divine Being* 物自體なる謎より、實踐理性における *Noumena* 睿智的本體たる神に至る、眞實在の構成と構造を明かにして、宇宙間眞乎の「絶對」の何たるかを教ふるものであるからである。而してかく眞の絶對が知らるゝところに、始めてこの絶對に對する吾々人間の *perichtho Halmgenahne* 人格的態度決定がなされ、宇宙に對する態度決定がなされ、人生に處する態度決定がなされ、然り人生の意義・生命の目的・歴史の終局・時と而して時に對する永遠の問題が解決せらるゝものであるからである。しかしなほ今しばらく島地氏の所説に耳を傾けよう。氏は佛陀論の諸問題の結尾において云く、(佛敎大綱、三四四—四五頁)

藤原時代より今日まで凡そ八百年間、日本佛敎の歴史は本覺思想に立脚し、其所には又危險性も少くはなかつた。本覺思想よりすれば佛陀は本來與へられたものとなり、新しき努力も、奮闘も創造も、結局必要でないこととなる。茲に留意して日蓮上人は本覺思想に立ち乍らもその信仰を始覺思想に求め、親鸞聖人は本尊を始覺佛となすもその

信仰は本覺思想に立脚し、法然上人は本尊及び信仰を共に始覺となすに至つたのである。始覺思想は本覺門より見れば道徳的にして嚴懲に過ぎざるの觀なきにしもあらずといふところがあるが、それだけ危險性は僅少である。これに反して最も危險性を多く伴ふのは眞言にして、彼は信仰も本尊も皆共に本覺思想に立脚してゐるため、總て、信仰的には迷信に陥り、道徳的には自然主義に走らんとした所以である。これを佛敎本來の立場からすれば飽くまで佛陀論の中心思想は始覺思想でなければならぬ。従つて一佛獨成の思想は始覺思想に立つて正しく思考するとき、佛陀の極證は現實には認められないこととなり、釋尊の成佛と雖も或る程度の成佛にして、釋尊は今なほ修行の眞最中と云はなければならぬ。釋尊以後成佛せしものも陸續として存するが、それ等は何れも皆分證であり、又釋尊以前に於ても單に七佛のみに限らず無量の佛の存在することになる。吾々も亦、その小佛中の小佛にして吾々は吾々自身の中に更により高き大佛を見出し、無限に向上の一路を進むべきである。併し吾人の云ふ始覺とは過去に現はれたるが如き化石せる始覺思想を意味するものではなく、華嚴天台等に於けるが如く無限の向上進歩を辿りつゝ、刹那々に成佛を實現せんとするものである。新く考へるとき釋尊には究竟成佛はないと云はなければならぬが、併し、これは始覺思想に立脚して論ずる場合のことにして、これ又當然、本覺思想に立脚せる敎法學によりて裏附けられなければならぬ。敎法學に現はれたる佛陀は何處までも法中心であり、始覺思想が何れかといへば人格性に據るに比して、本覺思想は法の絶對性に據るものである。これを純粹信仰に移すとき、かゝる佛陀は念々刹那に即して吾々の上に實現すべきであり、茲に又新しき自力と他力の問題が生じて來る。

ひるがへつて氏がひそかに自ら獨創體系として誇り、以て佛陀論と共に、東大の講壇に講ぜし「日本佛敎本覺思想の概説」を見るに、その初に云く、(佛敎大綱、九—一〇頁)

第八には、根本佛敎のそれに比して、本覺門思想が、果して、正統的意義を有つものなりや否やを究むるにある。大體的の見方からしても、この思想は、根本佛敎のそれに比して、極めて、異端的特色を有つ如くみゆるので、したがつて、吾人は、先づ、この本覺門思想の概念を明かにし、これと根本佛敎のそれとの異同を、論究するの要がある。

第九には、佛敎の本覺門思想と、基督教神學との區別を明かにするにある。けだし、本覺門の思想は、その發展

とともに、ますます、基督教的一神教に接近し、それが思想的內容も、殆んど、區別すべからざる状態に進めるやに感ぜられる。したがつて、この兩者の異同を明かにするの要も、切である。

第十には、この思想の將來について、考察せんとするにある。けだし、過去及び現在における本覺門思想は、その自由性を發揮し、又しつゝあるものであつて、教種主義が、やうやくその勢力を失はんとする今後の將來に向つては、當然、ますますその勢力を奮ふものなること明かである。宗教上の歸一運動の如き、ユニテリアン主義の如きは、みな、これが片影とみるべきであらう。吾人はこの思想の將來について、眞面目なる批判的態度を失はざらんことを、特に、注意しなければならぬ。云云
さてこれらの問題はいかに解決せらるべきものであらうか。

十四、絶對的實在の條件とその體系構成

絶對的實在とは何ぞや。それにはまづその權利問題、すなはち眞理的根據 *quintessence* を明かにして、據て以てその *quintessence* 事實問題すなはち現實的實相を論ずべきものでなければならぬ。而して前者より後者へ到達すべき架橋すなはち媒介の原理として、その *Quintessence* 生成を説くべく、さらにその *Quintessence* 生成の完了、すなはち個として現るゝ歴史的時間の創造と超越の上において、*Quintessence* 認識の完成型を明かにせねばならぬ。かくして絶對とは價值と實在との自覺的すなはち人格的統一としての *quintessence* 現實的事實たるべく、したがつてそれは自己の絶對なる所以の「哲學的根柢」たる本體を有し、その絶對と成り得たる所以の「道德的由來」たる因果を經、さらに自己の眞に絶對なる所以を徹底「自覺的認識」し理解し、かつその絶對なる自己そのものを自在に受用し活動するところの、「一遍在にして全智なる全能者」といふものでなければならぬ。しかも是くの如きものがあまつさへ更に有始に非ずして「無始の實在」たるものでなければならぬ。

而していかなる有限的理性すなはち吾々人間も、その生命の究極完成すなはち人格の最高要求を充足し得て、こゝに宇宙根柢 *Metaphysics* 即己心根柢としての絶對意志の對象界を、永遠なる眞理の直觀としての叙知的對象界となし得るものでなければならず、しかもこのことの可能なるためには、そのいはゆる宇宙即己心として凡ての個に内在す

るところの先驗的普遍的本質的根柢が、時の無限の開展すなはち因果の無限の發展によつて、限定し盡され開發し盡されるものでなければならず、換言すれば、萬有無限の存在と性質と作用の限界性と、および作用とは必ず相互作用としての法界社會的プラス法界歴史的な交渉性とが、その萬有に共通する「絶對的超限界性すなはち超時間空間的・超個體性的場所に於て融通され盡すものでなければならず、すなはちもしこれを限定といはば所謂「自覺的限定」を完了して働くものより見るものへ至り、又もしこれを融通といはば所謂「法性融通」を終結して佛性圓融の極致に達し、以て眞に佛果菩提を獲得するといふものでなければならず、又これを價值に對する反價值の關係よりいへば、己心の全面を壓し即法界を壓する根本無明が斷破され盡すものでなければならず、さらにこれを時の關係よりいへば、無作の超時間的なるものが有作の時間的なるものの上に現れ盡すことでなければならず、今一たびいへば、パラドックス(逆説)の如くではあるが、無限に盡くし得ざるものがしかも全く盡くし得、否、盡くされ得るものでなければならず、かくて眞實在の必須的形式たる時空無限の絶對範疇を全く自己の内に見、いはゆる論其横堅、照無限極、したがつてその時空の全體系を充満する萬有存在の無始以來の實相を悉く自己に體驗するに至り、據つて以て完成人格としての「多絶對」が、徹底的普遍妥當の認識を獲得し、内面的貫通の十重無盡なる「相互統覺」をなすことによつて、全く「唯一的絶對」としての「綜合統覺」を構成する一大統一的な人格を現出し、是くの如き大統一人格が無始無終に宇宙に實在し、宇宙を包攝し、宇宙を統覺し、宇宙を救済する、といふところに於てこそ、眞に十全なる意味においてそれを「絶對」と名づくることを得るに至るのである。

しかも吾々が是くの如き絶對靈格を完成せんが爲には、既に實在せる絶對靈格との相互協力を必須の條件とするものでなければならず、何となれば一因非生は縁起の根本原理であり、在因必藉三師保、果滿稱爲三獨悟、(摩訶止觀一の)ゆゑに内外の因縁感應は萬物生成の原則であり、自力と他力との絶對的合成は成佛の不可缺條件たるものであるを知るべく、さらに一步を進めてこのことの可能なるためには、我は實にこの實在の絶對靈格を我れ自らに本有するところのものであらねばならぬのである、然り偉大なる超越者を己心に本有・内在することを以て、眞に實在の問題の最後の *standing vote* 決定投票を投ずるものであらねばならぬ。

かくして本體論上の先驗的原理と、生成論上の經驗的因果と、認識論上の叙智的超時間性と、救済論上の感應的常

時間性といふ、哲學的・道德的・宗教的一切の *conditio sine qua non* 必須不可缺條件たる四門を完具整齊したるものこそ、眞に絶對と名くべきものであらねばならぬ。あだかも絶對の學・實在の學・智識の最終統一の學と稱する哲學に、また三部四門あり、一には實體の問題としてこゝに「形而上學」を樹立し、そこに更に二門あり、一には實體の質・量を論じ、二には實體の生成を論じ、前者においては更に、まづ實體の數量として、單元論と多元論と單即多元論等を論じ、つぎに實體の本質として、唯物論と唯心論と、二元論と一元論と、靜的一元論と動的一元論等を論じ、ついで後者すなはち實體の生成については、そこに因果論と目的論等を論じ、轉じて第二の領域すなはち第三門たる知識の問題としてはこゝに「認識論」を樹立し、まづ眞理の意義を尋ねて、模寫說や實用主義や構成說や直證說等を論じ、ついで認識の起原や限界や對象等を明かにすべく、その起原については、理性論や經驗論や先驗論等を論じ、その限界については、獨斷論や懷疑論や實證論や批判論等を論じ、その對象については實在論や觀念論や現象論等を論じ、さらに轉じて第三領域すなはち第四門としては、こゝに人生の問題として「價值論」を樹立し、まづ人生に對する文化價値の意義を明かにして、その根據や種類や普遍性等を論じ、ついでその諸分野を展開しては、まづ道徳より始まり、科學や藝術や經濟や社會や政治等を経て、つひに宗教に來たり、いはゆる靈魂の不滅と神の存在の問題に極まるに至る。これ實に現代における哲學的眞理の問題の諸領域をなせるものであり、しかのみならず奇くも哲學的に絶對の何たるかを探究しゆくとき、それは必然に宗教の世界に到達せざるべからざるものなることを、愈々明かに知らしむることを見るのである。

今を去る一千三百四十五年前の晩秋、天台山麓の一淨刹たる石城寺において、寂然として滅を示せる智者大師は、眞に眞理の問題に關して是くの如き三部四門の大綱を提擧し、これを綜括して五重玄義と稱する實在體系を構成してゐる。まことに永遠なる眞理の探究は、東西古今を通じて滲るところがない。けだし五玄の中、釋名と判教とは首尾に位して總論といふべく、本質は辨體・明宗・論用の三支に存する。而して辨體とは何ぞ、云く、

正顯體者、即一實相印也、三軌之中、取一眞性軌、取一不思議不生不滅、取一苦道即是法身、取一無作四諦、取二滅諦、取一眞諦、取二中道第一義諦、取二實諦、取二無諦也。若譬喩明義、如梁柱網一屋、非梁非柱、即屋內之空、屋若無空、無所容受、因果無實相、無所成立、實相爲體、非梁柱一也。

ゆゑにこれ法性實相を指して體と名くるものであるから、これ實體論であり、つぎに明宗とは、

宗者、修行之喉衿、顯體之要蹊、宗致既是因果、因果即二、體非因果、體即不二、如梁柱持屋、結網網維、提維則目動、梁安則栴存。

すなはち體を顯すの因果を宗となすがゆゑに、これ生成論であり、さらに論用とは、

用是如來之妙能、此經之勝用、如來以三權實二智爲三妙能、此經以三斷疑生信爲三勝用、祇二智能斷疑生信、生信斷疑、疑由三智、約人約法、左右互論耳。(法華玄義 八上下、九上下)

これ明かに佛陀の認識論と救済論とを表すものなることを連観すべきである。

しかも是くの如き眞の實在とは吾々人間を離れず、佛陀といふは最大の人間解釋に外ならぬ。西洋の哲學・宗教はその全體を通觀するに元品の無明がこれを覆うて、神は毎に獨斷に坐するも、何ぞ闢らん眞の神の構成と構造は人間を離れて置くことを得ず、はたまた人間の生命と生成は神を離れては歸趣を知るに由なし。果然、人類古今の思想史上を貫き、眞に哲學的なる實在の學・實在の教として、宗教的主體と客體とを完説したるものは、まさしく天台が佛教科史上始めて整然として、その五玄の根據としかつそれを適用したるころの法華經に存するのである。即ち法華經は序品の最初より如來の白毫相光裡、十界の人格實在といふ *quid facti* 事實問題を示し、而して十界といふ實在の中にはおのづから價値的差別あり、いはゆる *Esse* 現實と *Sollen* 理想あり、即ち迷悟の別あり、此においてか方便品にはその *quid facti* 根據問題として十如因果を示すと共に、現實の理想化または理念の現實化として、絶對者如來が人類世界に出現したることを説き、その緣由を「一大事因緣」と示し、しかも是くの如き靈智と大悲の緣由が、まことに時空無限の全實在界を貫いて、塵點久遠・無始無終の本因緣なりといふ動的 *quid facti* 根據、また即動的 *quid facti* 事實なることを示されたるものこそ、實に壽量品の顯本教義となすのである。ゆゑに佛陀の人間論を佛性論といひ、佛陀の絶對者論を本佛論といふ。その始は人間の全體を以て始まり、その終は佛陀の全體を以て終る。この根柢と過程と完成とを整説するところに、かの實體・生成・認識・救済といふ哲學的三部四門あり。

予はこれを形式的規定としては「無作・有作・有始・無始」といひ、その内容規定としては「眞如・因果・統覺・圓慈」といひ、とくに純然たる本佛規定として一切を本概念の體系となすときは「本有・本果・本覺・本願」といふ。

しかもその本有といふ中には *quid juris* 根據たる無作本有の眞如と、*quid facti* 事實たる無始本有の本佛とを共に含み、しかも本佛は必ず因果を含みながら、しかも無始より因に非ずして果なり、即ち本果なり、その果上の人格的内容とは即ち無始の覺願・無始の智慧なり。有・果・覺・願の四面は本佛の實在國內において無盡の相渉・交映を現す。これを眞に大涅槃の常・樂・我・淨といふ、然り本佛の秘密蔵といふ。否、而して最後の一步、最後の本有、是の如き絶対の本佛をつひに我が己心に本有する處にこそ、奇くも宇宙萬有を貫き、人類の歴史と社會とを貫き、その一切の思想文化を貫いて眞に唯一正明なる宗教そのものの *quid juris* プラス *quid facti* 根據かつ現實ありといふところのものこそ、眞に日蓮聖人の「觀心本尊」の宗教哲學であり實踐體驗であらねばならぬ。本佛の宗教こそ眞に實在の宗教であり、本佛の哲學こそ眞に實在の哲學であらねばならぬ。

予は上來すでに十五回にわたる十數節において、予の思想の一端を示した。それは主として、實在根據論たる眞如法性論と、實在發展論たる佛性向覺論との、一分を説いたものである。元來、予の「本佛の教學」は約五篇より成るのであつて、本誌に寄せたるところはその抄略であるのである。今大體の組織をいへば、その第一篇においては、序説として「佛陀の明教と皇國の天職」を論じ、こゝにまづ「本佛思想概説」を試み、佛教最後の目的の奈邊に存するか、然り人類最大の目的の奈邊に存するか、而してその思想構成として、本佛實在に達すべき佛教教系の綜合統一はいかなるものなりや、を一瞥し、ついで「世界史の哲學と立正安國」を論じて、眞乎の世界史の哲學は、單にいはゆる民族の哲學のみにとゞまるべからず、民族は世界史の主體なるも、決してその全部にはあらず、吾人は單に民族至上の觀念に醉ふべからず、それは實に却つて恐るべき人類の不幸を現出せん、あだかもかの古代ギリシヤにおいて、ペルシヤ戰爭に勝利を博せし當時、エスキロス・ソフオクレス・ユウリピデス等の三大劇詩人が相ついで並び出で、祖國の勝利と民族の光榮とを謳歌したるも、それはつひにたゞ民族の範圍にのみ跼蹐したる敘事詩たり抒情詩たるものとしてとゞまり、さらに大いに眼界を廣うして人類世界の全體と宇宙の根本實在ないし絕對なる神の問題に進み入ることなかりし所以を陳べ、彼等はつひに古今を通じて思想史の問題たる、一宇宙における人間の地位」を自覺せず、歴史の意義を解せず、超歴史の永遠の王國に至らず、これに反し、この問題の第一歩は、西洋史上にあつては實にイスラエルの豫言者より出でたることを見、かくて眞の世界史の哲學は、「民族の哲學」ならざるべから

ず、然り眞の世界史の哲學は、人類の全體・文化の全體・眞理の全體・實在の全體・宇宙の全體を、嚴密にかつ雄渾に大觀せざるべからず、而して人類世界の全體を達觀するとき、果然、人類は人類を超えて超人間の絶大無限の眞實在に直接するに至るべく、否むしろひるがへつて、この尊嚴なる宇宙的絕對靈格が吾々の人類歴史に發刺としてその偉大なる足跡を印し來たるところにおいてこそ、世界史の最も brilliant 燦爛たる部分が存するものなることを論じ、しかもそれは必ずや一定特殊の歴史的・地理的はたまた人種的必然の制約條件を伴つて出現し啓示さるゝものであるが、しかも吾々は——フツナルの *Phänomenologie* 現象學的用語を以てすれば——かゝる有限相對なる一切の *being*、*thing* 見方や立場を *nachkommen* その括弧を外して、眞乎その眞の絕對者たるの眞容を捉へねばならぬことを論じ、以て眞に偉大にして永遠なる絕對の眞理は、時の古今・洋の東西・民族の差別・國家の限界等をすべて超越するものなるを説き、しかも翻つて思へ、東西古今の思想界に滔々として風をなして論ぜらるゝところの神といひ絕對といふは、果して眞乎の絕對なりや、果して眞乎の神なりや、感情的陶醉と獨斷の神・脊理の神・不合理の神・嚴正なる眞理の批判の前に没落しゆく運命の神、これ果して人類文化を幸ひするものなりや、かくて實在の問題は「本有」の問題にあり、哲學の諸分野は本有概念の諸領域にあり、而してそれはまづ、(一)内に省みて佛性の無作本有を知り、(二)外に仰いで本佛の無始本有なるを信じ、さらに三轉してこの絕對の本佛をもつひに吾々自身の内面に本有する、いはゆる己心の内奥に本有する、吾々は實に我が一念の己心の神祕なる内奥の世界に、無作にかつ無始以來、この尊嚴がたく温客親しむべき本佛を本有する、これをこそ眞の「觀心本尊」といひ、「本因本果」といひ、「始本統覺」といひ、「一念三千」といふところのものなることを論じ、かくて人生は戰なり、人類の歴史はつねに戰なり、而してその戰の眞の意味はもろろん「正義の戰」にあり、正邪の戰にあり、而してその確信はすなはち「善の勝利」にあり、これ歴史哲學の確信ならざるべからず、しかしながらそれは果して、いはゆる有つものとの有つものとの戰なりや、然り、それは單に資源や領土の獲得のためのみの戰にあらず、實に吾々人間が「我れに本佛を有つか有たざるか」の戰こそ、人類最大の戰なることを明晰し、かのハムレットの *to be or not to be* 生か死かの問題も、かくの如き予のいはゆる *to have or not to have* 有つか有たぬかによつて、一舉にして解決せらるゝものなることを論じ、こゝにおいてが大聖釋尊の出現成道と皇國日本の大東亞戰とは、古今相隔つるも共にこれ一大降魔戰にして、その意義たる

や有形無形・靈肉兩面にわたるもの、しかも祖國今日の大東亞戰が、奇しくも佛祖の降魔成道會にその火蓋を切つて落せしは、そも／＼これ何等の深意を藏するか、まことにこれ本佛感應の啓示たらすんばあらず、而して往古佛祖の降魔成道と今日皇國の大東亞戰とは、實に人類史上の二大事實たり、然り人類史上の二大戦ひたるのみならず、さらに世界の將來に對する二大豫言たることを斷じ、ひるがへつてこゝに一たび人類の世界史を大觀して、國家の隆替と文化の消長とを考察したる後、その結論として、吾々は固より國家民族の發展をこひねがふも、しかも人間生存の目的の何たるか、宇宙法界の實相の何たるか、はたまた絶對的實在の何たるかを、知ることなく解することなく眞理に盲目なる如き人生に到底甘んじ得ざるものなると同時に、他面においてまた、曾ては永遠なる眞理の榮光が輝き、絶對的覺者の出現したる地なりとはいへ、しかも今や國亡び民族流浪乞食の民族として敗殘の運命に苦悶呻吟するが如き亡國の悲劇には、また斷じて甘んずることを得ず、かくて此においてか、決然として我々は「立正安國の教學」を擁護せざるべからざることを唱道し、而してつひに「知法思國の先覺・日蓮聖人」を掲げ示し、以て宇宙の大法を國家的中心に結束して護法護國と四海歸妙を高調しつゝ、あまつさへ祖國未曾有の大國難期にあたり、從容として國體光顯と人類救済の大誓願に終始したる聖者の一生・國士の先蹤こそ、日本今日の民族的絶好典型たり、はたまた世界史的人格儀表たることを論じ、而して實に日本民族永遠の理想は、「宇宙絶對の本佛と天業恢弘の靈力」との相照相光に存するものなることを諷んで説き、しかも見よ我が日本今日の思想界において、實に我が「本佛實在の大法」が非常の危期に直面せるに際會しては、憤然騰起して予はこの「本佛實在の宗教哲學」を血肉を割いて綴る、これ實に予の「法統愛護録」たるものなることを高唱したるものである。

而して以上が、本論の序篇ともいふべき第一篇の梗概であるのである。(つゞく)

南無妙法蓮華經
昭和十七年重陽節 房州天津 本化別頭の教發發祥の靈蹟に記す

記事

本部 閣 報

體口法會 日蓮聖人第六百七十二年體口御難會を迎へた、この頃の座の巨難は、凡夫日蓮より本化上行への一大轉換期であつた。開目鈔下巻に「日蓮といふし者は、去年九月十二日子丑に類はねられぬ、此は魂魂佐士の國にいたりて、返年の二月雪中にしろして有縁の弟子へ贈れば、畏ろしくて怕しからず、見ん人いかにおぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の未來日本國當世をうつし給ふ明鏡なり、かたみともみるべし」等云々。寔に日蓮聖人、日本國、法華經の奇しき因縁といふか、これ程の大奇蹟は史上未曾有の事實であり、神慮計り知るべからざる賢きことである。此の序巻が實に體口會であることを思ふ時、獨り日蓮聖人丈けの問題でなく、來るべき世界の重大契期である。日蓮門下の少數が九月十二日を記念するばかりでなく、それは實に天下の大衆が擧つて感銘すべき事柄なのである。

本部では當日午後二時、滿堂至誠を傾けて法味を捧げ、終つて護部理事の開會の挨拶に引續いて小林一郎先生の「不惜身命」と題せる講話、及び和賀義見師の「知法思國の奉行」に就て熱辯を振はれ五時退閉會した。隨分秋聲の厳しい時、長時間極めて緊張の態度を以て聽講されたことは、他に類例の訪ないであ

るまいか、有難い事である。

土曜例會 毎週の小林先生勝鬘經講座は、九月五日から、婦人會と共に開催されてゐる。

但し第三土曜日は、都合により婦人會ばかりを営み、大に相互の信行増進と、心ゆく迄浸々と法話座談に時の移るも忘れられた。

凡そ主婦が一家の中心となつて子女の養育にあたるべきは言ふ迄もないが、随つてその主婦自身の人格修養といふことこそ最も大切なことである。生めよ増せよと叫んでも唯多産丈けでなく、これを立派な第二國民に仕上げねばならない。これが大事である。最近の少青年の動向は極めて憂心に堪えぬものがある、かかる點を母たり姉たるものは充分に留意して、汚泥の中に在つても要具に染まざること蓮華の如くでありたい、それには怒る婦人會を大に善用すべきと思ふ。

信行會 毎月曜日朝六時より四十五分間を動修に専念し、後三十分前後の法話を遣教經中心に此の一夏讀けたのであつた。早朝の動行は各自の家庭内に於ても勿論有難い一日の身心の糧となるものであるが、殊に滿堂の潑刺たる若人が、燃ゆる信火に油を注いでの修法は全く莊重なもので、そこに一週七日の活躍の原動力が蓄積せられるであらう。其の爲に時間も可及的長くしたいのである、交通の便さへあれば、五時頃から始めて、せめて二時間位動修すれば、少しは清淨のお題目も唱へられるやうになるであらう。普通二三十分位の短時間で一心清淨の妙境に進み得る人は何程あらうか、修法が單に形式化することは警

戒すべきものと思ふ、初心の人にイキナリ長時間の勤修を要すべきではあるまいが、併し若し何等かの誓願に立つて拜む場合には、必ず自分の本心の精進出来る迄は、たとへ二時間でも三時間でも熱誠を捧げて眞剣の態度が示されるであらう。而して七日とか三七日とか相當の期間は断ちものさへして、一心不亂に祈念をこらすであらう、そこに私共に懺悔あれば、佛神の應酬は必ずあるべきものである。

祈りでも願ひなきこそしるしなれ

祈る心にまことなければ

日蓮聖人は、「天の加護なきことを疑はざれ、現世の安穩ならざることを歎かざれ」と仰せあるが、又「七難即滅、七福即生」と祈らんにも此御經第一なり、現世安穩と見えればなり、他國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも此の妙具に過ぎたるはなし、今百由旬内無諸我患と説かれたればなり」と、又「法華經の八の巻に云く、若くは後世受持讀誦是經異者乃至所願不虛亦於現世得其福報、又云く、若有供養讚歎之者當於今世得現果報等云云。此の二の文の中に亦於現世得其福報の八字、當於今世得現果報の八字、已上十六字の文ひなしくして、日蓮今生に大果報なくば、如來の金言は提婆が虚言に同じく、多寶の證明は俱伽利が妄言に異ならじ。謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、三世の諸佛もましまさざるか、されば我弟子等、こゝろみに法華經の如く、身命も惜しまず修行して此度佛法の定否を心みよ」と有名な撰時鈔に述べてあるが、この「身命も惜しまず修行」することの如何に至難なるかを痛感する。門下の福

界の爲、その反省を促さねばならぬ。共產主義や自由主義乃至選民思想等を是正すべき剛直な大法は、獨り我國にのみ存在することを祝福すると同時に特に有爲の壯青年の覺醒を促したい。「珠懷きながら迷ひぬる哉」といふことでは申譯ない、雙、盲者は日月に向ふも知らず、雙者は雷聲を聞かざるの過因いづこにありやである。

法華經といふ經典は、佛教中の一部であるとするやうでは情けない、法華經は已今當最爲第一と言はるゝのは相対的の比較論だけでなく、實に世間出世間に亘つて一切を關照統一する處の總綱であることをいふのである。昔楚の卞和が璞を懷いて荆山に堂笑し、涙盡きて血を以てしたといふことであつたが、幸に文王によつて天下の寶玉となり、昭王十五連城の璧となつたことに想到して感慨無量である。眞に國家を愛ひ、天下を救はんと志すものは、宜しく此の希有の大法を護持し、所謂讀誦護法、徒食の饑りなからしめねばなるまい。

見渡す所、門下の僧俗、その道念地に墮つたのではあるまいかとさへ思はしめられる。此際特に釋尊最後の御遺言ともいふべき遺教經を、心機一轉精進すべきだと感じた。即ち本師釋迦牟尼世尊五十年の御化導により、度すべきすべての衆生濟度を完遂遊ばされ、拘尸那城羅城外、白花の香も高き娑羅双樹の下に、將に御涅槃に入り給ふ寸前に、四方から雲集した澤山のお弟子等を轉はして、我れなき後の遺教等の當に歩むべき道、修習すべき誠を説き示されたのが、このお經であつた。ある人々の間には此經が小乘に屬するからと輕んじ視しむ傾もあるが、由

素は、二言目には「不自信身命」だとか「不惜身命」と口外はするが、それで事實は財色名等の五欲熾烈である。佐渡御書には「身命に過ぎたる惜き者のなければ、是を布施として佛法を習へば必ず佛となる。身命を捨つる人、他の寶を佛法に惜むべしや。又財寶を佛法に惜しまんもの、まさる身命を捨つべきや……世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法などには捨る事難し、故に佛になる人もなかるべし」と、國星を射貫かれて居る。

日蓮聖人は勿論私共と比較の出来ない本化の大菩薩であるが其の滅後に於て名もなき在家の無智盲昧の人であつても、至誠を擧げて修行したものは、必ず「祈のかなはぬ事はあるべからず」の現證を體得してゐる、敢て疑ふの餘地はないのである。「我不信を以て金言を疑はざれ、若しそれ信心強盛にして深重なれば、現當二世の所願必ず決定圓滿ならん」の證誠はゆるかぜでない、色願すべきものと思ふ。

今や國の總力を擧げて戰勝完遂に邁進し、赫々たる戰果を收め、統後亦各自職域奉公に餘念もない。前米大使の歸國後の放途にも、日本國の實力とその戰闘精神の旺盛を羨望的に述べてゐる。これ申す迄もない御秘威の然らしむる所であり、國民教化のためであるまいか。釋尊の微に入り細に亘つての明教と宗教情懷の啓發は、佛教の義の道徳をも一層徹底して國民精神を眞善美化せしめた。實に神佛三教の調和こそ、世界を化導すべき我が誇る處の精神文化である。若しその一を排したり二を斥けたりする者あらば、由々敷大事であり、國家の爲、世

來大業誇り、優越觀を日常生活に振り廻して、他を蔑視することとは最も警戒すべき心情と思ふ。これでは人心を把握することは出来まい、圓熟した達人なれば、實乘の程程のやうに頭が降らなくてはなるまい、法華經には「常不輕品」といふ一章に其邊の消息が説き盡されてゐるから、日蓮聖人も「過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未來の不輕品たるべし、其の時は日蓮即ち不輕菩薩たるべし」と仰せられたその門下の者が、祖師の御心に悖る如き傲慢不遜の言行あつてはなるまい、そこに本經のやうな慈誨は、特に有難く拜し日常の上に實踐致したい。口に立正安國を叫び、一天四海皆歸妙法を唱へても、信者自身の無言の生活状況が、どれだけ周圍に感化を及ぼすかを考へるがよい、寧ろ不言實行を貴ぶこそ國家に忠なる所以であるまいか、そこに護持正法の實はあるのであるまいか。斯様の意味より信行會は、お互の心に三大秘法を信じ、之を日常の行に示すべく精進を勵んで居る。平々凡々の正定家である。別に目新しい異つた修法を標ぶでもなく、又自分の家を捨て、他家の御不淨掃除に出張するやうなこともなく、極めて單純な勤行に、眞心を籠めてみ佛を渴仰し、清澄の一朝を満喫しつゝ、來る者は歓迎し、去る者は逐はない現狀で、而かも一生懸命である。

大昭奉戴日 毎月八日は酒悅立正産報會員、東京倉庫の方々を主にして、其他有志の團員各位とこの記念日を意義深く早朝六時を期して型の如くに擧式を續けてゐる。受持といふことは易いやうであつて、續かないものである、そこに信念を持つた者

の有難さ、月を經る毎に愈々強盛になる。恰後若は染める毎に色を深めるやうなものである。惡口を言ふ人は、日本人は歳のやうに熱し易く又冷え易いと評するが、それは無信仰の者には、そう見ゆるかも知れないが、併し信念一度決定すれば衰食を忘れ、一身一家を忘れて幾日でも幾年でも辛味する強靱性を具へて居る、これ明淨直の民族精神なるが故と有難く思ふ。どうかお互は此際にも本心の覺醒を促して、大御心を心として日常活躍致したいものである、各自その所を獲て職域奉公といふことを事實に見せ示すべきである、極貧の同胞が都市にも地方にも居るその生活状態も知つてはしい、又我國が各國と異つた特長の一として、中堅層の充實といふことも今後一層考慮すべき要件と思ふ。問題は擧げれば幾多續出するが、又詰めれば歸一する。畢竟心の師となるも、心を師とすべからずで、無明緣起に陥らぬやうに、我輩國の大理想を光顯せしむるに歸めねばならぬ。

講習會用テキスト前號掲載の筈なりしも、都合にて今回御參考に資することに致しました。

左に二三のテキストを掲げて、各位の御參考に資したい。

○我が國體の本義

序 言 磯 部 滿 事

へ、君民の關係 皇室を宗家とし、天皇を中心と仰ぎ、君民一體の一大家族國家即立體的關係たり。

ト、臣 民 道 國民は億兆一心、皇孫降臨當時の諸神の精神其體大御心を奉體する所に國民道義の根源存す。所詮明淨直の誠心を奉けて奉仕する處に臣子としての本分あり。爰に我國獨特の忠孝一本の道德確立す。これ惟神の大道に外ならず。

結 論

神人一如、君民一體の我國は、國民相互の和敬のみならず、進んで天業恢弘天下光宅、大に皇運扶翼の淨業に勇精すべきなり。須らく教なかる可らず。上宮太子云く、
佛教は神史の支義を稱す。と。

○儒教と佛教(儒教を論じて日蓮聖人の宗教に及ぶ)

小 西 隆 正

一、儒教大觀(人に約す)



明治天皇御製

國といふ國の邊となるはかり 磨けますらを大和魂 國のためあたなす寇は碎くとも 愛くしむべきことな忘れ七 國家觀四察
一、科學的知識に局するもの
二、哲學宗教の知見を加ふるもの
三、孤立的思想に偏在するもの
四、包容的精神に立脚するもの

本 論

我が國體

大日本帝國は萬世一系の天皇 皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ我が萬古不易の國體なり而してこの大義に基き、一大家族國家として億兆一心、聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を發揮する、これ我が國體の精華とする所なり。

國體の本義

一、肇國の事實 豐葦原の千五秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。

二、敬神崇祖 此れの鏡は専ら我が御魂として、吾が前を拜くが如、いつきまつれ。

三、輔弼の忠良 思金神は前の事を取り持ちて政せよ。

四、農業爲本 吾が萬天原に御す寶庭の穂を以て亦吾が見に御せまつる。

五、國士の經營 民を導くの本は教化くに在り。

二、儒教經典の變遷



三、孔子の略傳

孔子……父叔梁紇 妻……一男九女
母顏氏 第三女……孔子伯魚……子思……現代(七十七代)
四、論語に於ける孔子の思想



五、儒教の宗教性にたいする考察

季路問事鬼神子曰未能事人焉能事鬼 曰敢問死子曰未知生焉知死。

子疾病子路請新子曰有諸子處對曰有之……

子曰丘之新久矣。

- 六、道德と宗教の關係
- 七、日蓮聖人の宗教

○法 國 冥 合

山 口 智 光

- 一、本性と發現(國の傳統と國民の現實活動、靜と動)
「敵の地に深く入りける體內に機妙刻きの音の靜けさ」
- 二、立正安國、知法思國は日蓮聖人私教の生命
「知法思國の志尤も實せらるべきの處、邪法邪教の聲、論奏發言するの闕、久しく大忠を懐いて未だ微望を達せず」
- 三、佛法東流の豫言と大日本の國號
「予此の記文を拜見して兩眼潤の如く一身悦びを編くす」
(曾谷抄)
- 四、我が國體と法華經の宇宙觀
萬世一系の天皇の統治(樹德深厚)
久遠本佛の教化(毎日の大悲願)
- 五、法華經主義の道德 「主師親の三德」
- 六、本門戒壇の建立
「戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合し、王臣一同に三秘密の法を持ち……勅宣並に御教書を申し下して靈山淨

土に似たらん最勝の地を尋ねて建立すべき者か、時を待つべきのみ……三國並に一國浮提の人機海、滅罪の戒法のみならず、大梵帝釋等も來下して踏給ふべき戒壇なり」

(三大秘法抄)

七、身讀法華經と國土日蓮聖人

「大願を立てん……種々の大難出來すとも智者に我が義破られずば用ひじとなり、其外の大難風の前の塵なるべし。」
(開目抄)

三年病臥六旬、恰似々寒慙漢飢題

羅子登無極氏書 七を生入人生二種三宗乘 日容上人

○日蓮主義信仰の要旨

和 賀 義 見

- 一、發心—
懺悔的發心
道義的發心
推理的發心
實在的發心
感應的發心
神秘的發心
- 二、宗義—五綱教判
根性の融不融
教—イ、三種の教相—化導の始終不始終
師弟の遠近不遠近

- ア、本化別頭の教判—
在 滅 判
本 法 判
跨 節 判
絕 對 判
- ハ、但令用實—確實併用せず
- ニ、隨身常住の妙義
- ホ、佛界緣起の妙旨—佛果起用の法門
- ヘ、究竟圓慈の活攝—法界は一大本佛の常用中に起伏す
- ト、兩著一貫—佛法と世法の融合
お宮仕へを法華經と思召せ

- 三、信仰—受持法悦
- 四、道義—知恩報恩
- 五、護法護國—衣座室の三軌 三大誓願
- 六、得益—二世安樂 誓願起業
- 七、發策

福 島 教 信

八月二十二日 午後三時護部先生を高商にお迎へして例會を開く。三年生諸君にとつては最後の集りである。修法の後先生より國家と宗教との關係につき詳々たるお話があつた。次いで一同そろつて大町中村様方へ参り、おは襟心づくしの夕飯を頂きながら送別會を催した。今回芽出度く卒業される中村君、永井君兩君には最も困難なる時代に於ける護持發願の維持發展に多大の努力を拂はれ、且又五味、菊地、齋藤等の諸君の如き立派な後繼者を得て卒業されたことは、偉大な法勳と云はねばならぬ。この功徳は決して小さきものではない。人生に於ける障礙・失望・恐怖・罪惡等を乗り越えらるべき最も有力なる資糧を積まれたわけであつて、喜びに堪えない次第である。會は先づ二年生五味君の挨拶に始まり、中村君、永井君の答辭あり、次で護部先生より卒業生諸君に對し御懇篤なるお言葉を賜つた。又福岡先輩より信仰は決して捨てはならぬと、力強い激勵の辭があり、橋本先輩の挨拶にて會を閉ぢた。

同日夕 支部例會。毒量品自我保護講。當夜は新しい方も見

序 目

- 三大秘法—本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇
- 時、大集經—五箇五百歳
- 正法—
解説堅固
禪定堅固
讀誦多聞堅固
觀音多塔堅固
多造寺塔堅固
- 末法—白法隱沒觀靜堅固
皇紀一七一二年後冷泉天皇永承七年

えたので、特に自我憐の初より御講義下された。次いで福岡氏の感想あり、座談の後解散した。
 九月十七日 高商例會。文永八年九月十二日の龍口御法經にちなみ種々有難き御法經をいたされた、又新會員諸君の爲めに佛敎の根本たる四諦の法門を説示下さった。
 同日夕 大町中村様方にて支部例會。修法の後お自我供養講未來章全部終る。

團費誌料維持費寄附金額收

(自八月二十一日至九月二十日)

- 一金參 四也 東京 宇野博 順殿
- 一金貳圓五拾錢也 福島 三澤仲江殿
- 一金拾 圓也 同 菅野廉太郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 東京 平本幸司郎殿
- 一金壹圓貳拾錢也 福井縣 宮川日見殿
- 一金貳圓貳拾錢也 福岡縣 大久保久市殿
- 一金貳圓貳拾錢也 青島 梅澤良彦殿
- 一金貳圓貳拾錢也 岡山縣 岡野コキヨ殿
- 一金貳圓五拾錢也 愛知縣 中村新次郎殿

- 一金五 圓也 大阪 小澤きく殿
- 一金四圓四拾錢也 同 清原淺治郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 横濱 荒木蓮成殿
- 一金四拾五圓也 東京 東京倉庫運輸會社殿
- 一金貳圓貳拾錢也 千葉縣 廣部乾山殿
- 一金貳圓五拾錢也 東京 須藤仙吉殿
- 同 森千代殿
- 同 平尾加代殿
- 福岡 藤浪時康殿
- 平 藤浪時康殿
- 東京 石橋亨殿
- 群馬縣 増田清三郎殿
- 東京 柴田武治殿
- 福島 長谷川鐵雄殿
- 同 菅野達也殿
- 同 尾形信一殿
- 福岡縣 大久保久市殿

右難有入帳仕候也(以是領收證代用)
 財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

- 聖語錄 改版特價 金壹圓九拾錢
- 法華經要義 賜天覽 同 金貳圓五拾錢
- 日蓮主義心髓 同 金壹圓五拾錢
- 日蓮主義精要 同 金貳圓九拾錢
- 法華經要品 同 金五拾錢
- 本尊意識に就て 同 金貳拾錢
- 法華經の心髓 同 金壹圓五拾錢
- 黎明の原理 同 金五圓

- 佛敎の心髓 同 金壹圓七拾錢
- 本多日生上人 同 金拾錢
- 動行作法 同 金壹圓

河合妙明著
 皇道と日蓮主義 定價 金壹圓
 送料實費

東京市小石川區普羽町六ノ七
 財團法人統一出版部
 振替東京九四二〇番

統一團	一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半年	金壹圓貳拾錢 送料共
一年	金貳圓貳拾錢 送料共

○前申込ハ總テ前金ノ事
 ○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
 ○別轉送ノ場合ハ必ず新報共ニ御通
 知ノ事

昭和十七年九月二十七日印刷本
 昭和十七年十月一日發行
 (第五百七十一號)

東京市小石川區普羽町六ノ十七
 發行所 磯部滿事
 東京市四谷區内藤町一
 印刷人 山田英二
 東京市小石川區普羽町八ノ十一
 印刷所 野島好文堂印刷所
 電話牛込六九六番

發行所 財團統一團
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番
 東京市神田區淡路町二丁目九番地
 配給元 日本出版配給株式會社

統

一

明治三十七年十二月二十四日
昭和十七年九月二十七日
發行
第三號
郵政特准掛號
認爲新聞紙類
（本紙發行所）

第五百七十一號

第四十七年

十月號